

令和 4年 10月 13日

25A同期会の活動について

6月7日(火)令和4年度 シニアカレッジ新潟25A同期会 の活動は、新潟市の市政バスを利用して「江南区を知ろう」ということで、親松排水機場・江南区郷土資料館・北方文化博物館・亀田郷土地改良区の見学研修を行うことで計画を立てそれぞれ現地で関係者からの設備や能力などの説明を聞いたり見学に行ってきました。



男性6名、女性5名の参加者がありました。

一帯は亀田郷といわれており、信濃川、阿賀野川、小阿賀野川に囲われた低平な輪中の湿地帯であることから、戦前までは胸まで水に浸かりながらの米づくり農作業、また戦後は、牛馬による田の田起こしなどの作業が続けられてきたという地域でありました。

日本海の平均潮位以下の土地といわれ、現在烏屋野潟との水位差はマイナス2、4メートルあると言われています。近年は親松排水機場をはじめとした排水機能が向上し加えて、基盤整備や機械化・多角化なども進み田園都市化へと様相が変わってきております。

「農業というものは、日本のある地方にとって死に物狂いの仕事の連続であったように思える」これは作家、司馬遼太郎の「街道を行く～潟のみちの冒頭の一節である。司馬 遼太郎、大正12年8月大阪生まれ、本名 福田 定一、日本の小説家・ノンフィクション作家・評論家、「坂の上の雲」「竜馬がゆく」「峠」など、1971年急逝享年72歳

亀田郷について

大いなる大河、信濃川と阿賀野川にはぐくまれた緑豊かな都市近郊の田園地帯亀田郷は日本海側の中心都市新潟市の中央部（旧新潟市南東部とこれに隣接する旧亀田町と旧横越町を包含する地区）に位置する緑豊かな田園地帯です。

信濃川と阿賀野川そして両河川を連絡する小阿賀野川に囲まれた低平輪中地帯という地理的特徴を持ち、利水、治水や土地基盤整備が市町村という行政の単位をこえて進められてきた歴史を有し、これにより今なお亀田郷は農業や生活面で一体的な社会を形成しています。

亀田郷一帯を人々は「芦沼」とよび、「地図にない湖」とも表現した。農民は冷たい水に腰までつきりながら田植えや刈り入れの作業を行っていた。しかし稲は半ば水草のように浮いて育ち、満足のいく収穫は得られない。また海が荒れると海水が川を逆流し、稲を腐らせてしまう年もあった。農民は食料を得られないという不安を抱きながらの生活を強いられてきた。

亀田郷は戦後まもなくまでは信濃川流域で最も開発が遅れた地域で、海水以下の土地が約3分の二を占め、日本海の潮位に左右される低湿地帯でした。このように非近代的な土地条件の中において国営土地改良事業が着手されました。

基幹排水堤を建設、ここに集められた水をさらに大規模排水機場を建設して信濃川、阿賀野川に排水するという大規模な事業でした。工事は戦後まで続き、ついに昭和32年に乾田化に成功、かつて「芦沼」と呼ばれた水面は広大で緑豊かな大地へと変貌したのです。

田園都市について

田園都市とは大都市近郊の田園地帯に計画的に建設された都市、草木の緑が維持され田畑などの残る都市、また大都市郊外に、その間の交通の便を図るなどして計画的につくられた都市。

豊かな自然環境に恵まれた都市、その後の都市計画、とくに住宅計画に対して大きな影響を与えることとなる郊外型の都市開発は、大きな影響を与えた。自然との共生、職住近接などとなっている。

親松排水機場の屋上から鳥屋野潟方面を望むと、そこはまさに田園都市そのものであります。近くには大きな病院・サッカー場や野球場、公園に学校、産業振興センター、すぐ脇には新潟県内各地と連携する高速道路・主要地方道などが走っており、電気・ガス・水道をはじめ生活インフラは既に出来上がっております。



新潟平野を潤すはずの日本一の信濃川、明治29年7月の横田切れ(現燕市)や、大正6年10月の曾川切れ(現曾野木地区)と土手の決壊がありました。2回とも長雨による水害、水害地では半年の長期に渡り家や田畑が水浸しになったところも有ったそうです。

今年は関屋分水の通水50周年、大河津分水の通水100周年だそうです。それぞれの工事には構想、計画、調査、建設、竣工までには相当の資金と技術、期間を要したこと

今回の見学会で勉強できました。

